

きべりはむし

第14巻 第1号

目 次

オオチャイロハナムグリについて	高橋 寿郎	1
兵庫県のベニボタル(1)	高橋 寿郎	6
宝塚大橋のカメムシ	新家 勝	11
西宮市上ヶ原山田町のトンボ	田中 稔	16
兵庫県未記録のコメツキムシ	岸井 尚	18
ミヤコアラハダチャイロコメツキ宝塚に産す	岸井 尚	19
ヨコヅナサシガメ兵庫県南部の記録	森田 真澄	20
宝塚大橋の照明燈で採集した蛾(続報その5)	新家 勝	21
宝塚市清荒神のチョウ(追録5)	加藤信一郎	23
宝塚大橋のキイロゲンセイ	新家 勝	23
宝塚市内におけるフタモンウバタマコメツキの採集記録(続報1)	新家 勝	24
会 員 異 動		25

兵 庫 昆 虫 同 好 会

1986年5月

オオチャイロハナムグリについて*

高橋 寿郎

オオチャイロハナムグリ *Osmoderma opicum* Lewis はやゝ中型のコガネムシである。日本特産種でその個体数はそれほど多くないが日本全国に広く分布しているようである（北海道には記録が無く、屋久島産のものは若干相違すると）。兵庫県でも戦前から騒がれたコガネムシである。この虫に関して分布を中心とした小文を発表させて頂きたい。

本種は G. Lewis により "Notes on a new species of *Osmoderma* and a *Trichius* from Japan" と題する論文 (Wien Ent. Zeit. VI, Heft. 2, p.4, 1887) の中で中禅寺, 日光, 今市産 3 ♀ 標本によって *Osmoderma opica* と記載された種である。さらに同年 Lewis は "On the Cetoniidae of Japan, with Notes of new Species, Synonymy and Localities" と云う論文を発表 (Ann. Mag. Nat. Hist., XIX(5)) その中で (p.199) 本種を記録すると共に Harold が Hoffmann 博士が東京で採集したものを *O. barnabita* Motsch. として記録している (Deut. ent. Zeint., xxii, Heft. i, p.12, 1877) のは多分この種のことであろうと記している。Lewis は 1879 年に "A Catalogue of Coleoptera from the Japanese Archipelago" を発表しているがこの中では *O. barnabita* のみを記録している (p.14, No.1024)。



オオチャイロハナムグリの国内分布地図

* 兵庫県甲虫相資料・168.

1887年のSchönfeldt, H.v.の“Catalog der Coleopteren von Japan”の中でも
O. barnabita, Tokio (p.111)のみしか記録していない。

松村松年博士は1911年に“Erster Beitrag zur Insekten - Fauna von Sachalin”
を発表され (Tohoku Imp. Univ. Jour. Coll. Agr. 4(1):120) 其中で (p.381) *Osmoderma*
barnabita Motsch. コアシナガハナムグリ (Shiraraka, gesammelt in einen Exemplare)
と和名をつけて記録された。

Arrow, G.J.は1913年“Notes on the Lamellicorn Coleoptera of Japan and
Descriptions of a few new Species”なる論文を発表 (Ann. Mag. Nat. Hist. 8,
xii, pp.394-408) しているが、其中で *Osmoderma opica*, Lew. のみを記録している
(p.396) (属名 *Osmoderma* は中性であるから種名は *opicum* にならなければならない)。

1923年にいたって良く知られている新島善直、木下栄次郎両博士の名著“こがねむしに関する
研究報告 (第二)” (北大農学部演習林研究報告 vol. 2, No 2) が発表になりこの中で日光産1頭の
標本で始めて図説をされた (p. 187, Taf. VI, fig. 6)。同時に松村博士が1911年に樺太産で
記録された *O. barnabita* は和名の様に形は小さくなく脚は長くないものでありそれに該当する
標本が北大昆虫学教室に無いことからどうもよくわからないむね記録しておられる。

1931年には松村博士の日本昆虫大図鑑 (刀江書院), 日本通俗昆虫図説, 第3巻 (甲虫之部)
(春陽堂) が出版され夫々に本種が図説され“日光に産するも少し”とされていた。同じ年 (1931)
山本泰二氏は“昆虫” (Vol. 5, No 4, p.185-186) 誌上で“富士山麓パノラマ台, 赤城山, 富山県
猪谷”の3ヶ所を新に報告された。

その頃よりこの虫が一般に知られるようになったと同時に新産地の発表も見えるようになった。
1937年には平山修次郎氏により青森県十和田湖畔産 (12-VIII-1935) が原色で図説された (原
色千種昆虫図譜 pl.63. f.14, p.134)。1941年には同じものが原色で再図説された (原色甲虫
図説, pl. 21, f. 14, p. 50)。

1939年には伊賀正汎氏によって本種の生態の一部が発表され幼虫, 繭の図説もされた (昆虫界,
Vol. 7, No 66, p. 451-454, pl.294)。

戦後ではほとんどの図鑑類に図説されているし, 各地からの記録も多く発表されその生態の報文
も出たりして良く知られたコガネムシになっているが依然として個体数が少ない種のようにでありその
分布も広いとは云え可成り限定されているように思われる。

ところで東京に産すと記録されたことのある *O. barnabita* なる種は S. Schenkling の W.
Junk Coleop. Cat. Pars. 75, 1922 によるとシベリア, 満洲, 北支に分布する種のものであ
る (原記載 Bull. Moscou XVIII, 1845, I, p.58)。Medvedev の Fauna USSR Vol.X, No 4,
1960 には図説されている (p.387-389, f.990-994)。この分布表によると朝鮮にもこの種が

いることになっている (Medvedev は *Osmoderma* 属 5 種を収録しているがその内 3 種について図説をしている)。

C. W. Kim の "Distribution Atlas of Insects of Korea" (1978) では朝鮮に分布しているのは *O. opicum* としている (pl. 38, f. sc50b, p.379)。写真が今一つはっきりしないし記載も割合簡単なので真の *O. opicum* なのか *O. barnabita* であるのか良くわからない (♂交尾器は明らかに異なるが前胸背中央の隆起、頭部の隆起の形状も可成り異なる様に思われる)。やはりオオチャイロハナムグリは日本特産種と見るのが良いのかもしれない。

ユンクのカatalogではこの属のコガネムシは 8 種が出ている。特に *O. eremita* (Scopoli) はヨーロッパに広く分布している種として良く知られている (筆者所有のチェコスロバキア産 1 ♀を見た所ではオオチャイロハナムグリに比し前頭両側の隆起も小さく前胸背の隆起は 2 つなるもやや平たく著しく隆起せず平行で中央部外側に曲り、基部近く若干緑色を呈し、点刻は円形のものがやや大きく明瞭、上翅会合線ぞいに明瞭な横皺状刻を密に有する。オオチャイロハナムグリの方はこのような皺状刻は僅かにして明らかに点刻を散布する)。北アメリカにいる 2 種について緒方靖哉氏が図説しておられるが (北九州の昆虫, Vol. 28, No. 3, 1981), こちらも日本産と良く似た形態をしている。

本種の生態に就いてはまとめて詳しく報告されたものはないが一応前記伊賀正汎氏 (1939) のもの以外に草刈広一氏の "オオチャイロハナムグリの採集と飼育" (昆虫と自然 Vol. 13, No. 5, p.22-24, 1978), 中山一氏の "オオチャイロハナムグリが羽化" (げんせい 38/39: 54, 1980) の報文によりほぼその生態がうかがえると考える。それ等によると場所によっては割合個体数は多いようであるが自然状態での採集となるとやはり少い種といった表現が当るようである。

一応今迄の記録を筆者の所有文献で拾って見た (多くの脱落はあると思われるが傾向はうかがえると思う)。同定も恐らく間違いはほとんどないのではないかと考える。

オオチャイロハナムグリの文献にあらわれた記録。

青森県十和田湖畔奥入瀬溪流地帯 (平山修次郎, 虫の世界 1936, 1 (5/6): 17)。三戸町 (渡辺福寿, 森林動物相調査報告, 第一輯, 1937, p.95, pl. 24, f. 49)。上郡 (上北郡) 塩釜 (岡野喜久磨, 東北昆虫学会報告 5: 19, 1948)。

秋田県八幡平 - 焼山 (中山周平, 昆虫界 9(84): 113, 1941), 鹿角郡十和田湖畔鉛山 (東北昆虫学会々報 1(1): 28, 1946)。

岩手県盛岡, 区界峠, 平津戸 (竹内誠一, 岩手県甲虫誌, 第一巻: 117, 1940), 下閉伊郡門馬村区界峠 (村山 孝, 昆虫世界 50(574): 31, 1946)。

山形県飯豊山 (鍋越山), 朝日岳 (朝日鉱泉) (板垣輝彦, 山形昆虫同好会々誌 2(1): 6, 1964)。

西川町：中村。鳥海山：ソブ谷池。飯豊山：温身平。吾妻山：大清水（櫻井俊一，I. C. 13:21, 1984）。小国町温身平，米沢市日布高湯（草刈広一，昆虫と自然 13(5):22-24, 1978）。

宮城県鳴子町中山温泉附近（渡辺福寿，I. C., p.25, pl. 24, f. 49, 1937），桑沼（草刈広一，I. C., p. 22-24, 1978）。

福島県飯豊山麓（谷口 実，昆虫世界 37(2): 69, 1933），湯ノ花（草刈広一，I. C., p.22-24, 1978），平（虫同友会，虫の世界 1(11/12):81, 1937）。

茨城県（日置正義，1973 るりぼし(1): 3），水戸市附近（テクラ 2(3): 53-54）。

栃木県日光湯本（虫同友会，1937 虫の世界 1(11/12):81。伊賀正汎，1939 昆虫界 7(66): 451-454），奥日光中宮向（河田禎二，1950，紀州昆虫 2(6): 150），奥日光外山沢（稲泉三九，1972 栃木県の動物と植物：468-469）。

群馬県利根郡新治村法師温泉（平山修次郎，1936 I. C., 1(5/6):17。井口 宏，新村太郎，1938 虫の世界 2(2): 45），尾瀬沼～尾瀬ヶ原，武尊山（高島威男，1966 インセクト 17(2/3): 25），赤城山（山本泰二，昆虫 5(4): 185-186）。谷川岳，上野村（須田 亨，群馬県動物誌，p.337, 1985）。

新潟県（中根猛彦，越佐昆虫同好会々報，1950，2(2):65。本間義治，新潟県昆虫図鑑，下：56，1982），北蒲原郡菅谷村大字上石川地内（500m alt.）（小池 寛，1954，新昆虫 7(13): 27），Echigo:Kamiiishikawa（中根猛彦，馬場金太郎，1960 長岡科学博物館報：8），湯沢町八木沢（山屋茂人，1984 長岡市立科学博物館研究報告(19):24）。

埼玉県廬坂峠白岩山（斉藤良夫，1978，埼玉県動物誌：227），大滝村大輪（小田 博，1985，寄せ蛾記 (44): 602）。

東京都奥多摩（平山修次郎，1936 I. C., 1(5/6):17），青梅市御岳附近（森 祐二郎，1970 昆虫と自然 5(3): 17）。

神奈川県箱根明神ヶ岳附近（佐藤勝信，神奈川虫報(19):108，1966），小田原：箱根，明神ヶ岳，丹沢，丹沢山（平野幸彦，1981 神奈川県の甲虫：296）。

長野県（信州昆虫学会，1979。長野県昆虫図鑑下：132），武州御嶽山（瀧島繁次，1938 昆虫界 6(56): 812）。

富山県猪谷（山本泰二，1931 I. C., 5(4): 185-186）。

福井県大野市：下打波。池田町：冠山。今庄町：夜叉ヶ池（佐々治寛之。斉藤昌弘，1985。福井県昆虫目録：121）。

静岡県富士山麓パノラマ台（山本泰二，I. C., 5(4): 185-186），二軒小屋（水野弘造，1968 すずむし 17(2): 53）。

愛知県三河川合（穂積俊文，1958 佳香蝶 10(34): 7.，佐藤正孝，穂積俊文，1984 愛知の昆虫

:191)。北設楽郡設楽町段戸裏山(松野更一, 1984 三河の昆虫 30:151)。

岐阜県槍平(水野弘造, 1968 I.C., 17(2):53)。

三重県平倉演習林(山下善平ほか, 1968 三重大学農学部演習林資料 1:60)。

滋賀県愛知郡角井(井狩正二, 1940 昆虫界 7(76):424)。

京都府京都市愛後山(数井郁二, 1954 新昆虫 7(13):27)。

奈良県春日山(西崎正夫, 1947 南大阪昆虫クラブ 1(5/6):8), 柳生街道(中山正成, 1963 大和の昆虫 1(1):37), 伯母子岳(山本雅則, 1979 Sakaiensis 16(2):143)。

和歌山県高野山(安藤貞一, 1939 昆虫界 7(68):625), 高野山奥, 院廟前, 伊都郡高野山不動坂 600 alt., 日高郡城ヶ森(護摩, 壇山上) 1000alt. (後藤 伸, 1950 紀州昆虫 2(3):120), 護摩ノ壇山(梅本 実, 1983 KINOKUNI 24:14)。

兵庫県神戸市住吉, 岡本, 養父郡氷ノ山, 美方郡扇ノ山(高橋寿郎, 1981 てんとうむし №7:25, 1983 きべりはむし 11(1):26)。

鳥取県伯耆大山(荒木東次, 1933 昆虫 7(5/6):274, 高橋寿郎, 1939 虫の世界 3(5/6):93, 1939, 昆虫世界 43(508):362。好本 精, 1942 昆虫界 10(105):731-732。

水野弘造, 1969 すずむし 17(2):53, 東 正雄, 1971 京阪神の動物:160-161。松村雅央, 1979 すかしば 11:21)。

広島県山県郡樽床, 奥三段峡(中村慎吾, 1966 比和科学博物館研究報告 10:9), 山県郡簡賀村中簡賀井(渡部泰明, 1969 広島虫の会々報 8:9), 宮島・大元公園, 樽床, 奥三段峡, 簡賀村(小阪敏和, 1971 広島虫の会々報 10:335), 宮島, 十方林道, 簡賀, 樽床, 奥三段(中山清隆ほか, 1984 広島虫の会々報 23:133)。

島根県匹見町広見(児玉 洋, 1984 すかしば 22:12)。

香川県多渡津南町野鹿ノ池(コガネムシ, 1939 虫の世界 3(1½):28, 矢野俊郎, 1961 松山昆虫同好会時報 16:19)。

徳島県大竜寺山, 加茂谷, 剣山(剣山, 見ノ越)(東祖谷, 名頃), 石井町, 加茂谷村吉川(矢野俊郎, 1961 I.C., 16:19), 剣山見の越近辺(長尾 悟, 1972 月刊むし 16:19)。

愛媛県面河溪, 皿が嶺(矢野俊郎, 1961 I.C., 16:19)。

高知県土佐黒尊(草薙忠明, 1936 昆虫界 4(27):302), 三木 杭(矢野俊郎, 1961 I.C., 16:19), 香美郡物部村笹越(中山絃一, 1980 げんせい 38/39:54)。

福岡県英彦山(土居義金, 1956 北九州昆虫趣味の会々報 4:12。神谷寛之, 1959 彦山昆虫目録Ⅱ:24。松田勝毅, 1960 北九州の昆虫 7(3):94。山脇好之, 1960 Worm Ship №49:1-3, 今坂正一・越智輝雄, 1980 北九州の昆虫 26(3):121), 障子岳(天野昌次ほか, 1963 北九州の昆虫 Vol. 10:12), 九重大船林道(緒方靖哉, 1977 北九州の昆虫 24(2)

:50), 英彦山, 障子岳, 深倉峽, 若杉山, 古処山, 熊渡山(高倉康男, 1978 生物福岡(18):28), 大官山(有江敬助), 1982 北九州の昆虫 29(1):53).

大分県由布院町山下池附近(大塚 勲, 1969 甲虫ニュース(7):3).

長崎県平戸島安満岳(松尾照男, 1982 北九州の昆虫 29(2):90).

宮崎県霧島山燐(磯崎恵明, 1968 タテハモドキ (3):34. 清水 薫ほか 1969 霧島山総合調査報告書:264).

熊本県八代郡国見岳(土居義金, 1968 北九州の昆虫 14(3):89), 市房山(大塚 勲, 1968 甲虫ニュース (3):3), 椎矢峠・五家荘(仁田尾), 市房山, 八代郡泉村二本杉(栗田琢也, 1985 熊本昆虫同好会報 30(2):16).

鹿児島県屋久島(三宅純男, 1971 月刊むし 1(2):35. 中根猛彦, 1984 屋久島原生自然環境保全地域調査報告書:60), 屋久島ウイルソン株~高塚小屋(加藤泰久・豊島亮司 月刊むし (136):37).

以上全国的に見てほど満遍なく分布している種なのではないかと思われるがやはりブナ, スギ, カエデなどの空洞にいと云われている様に幾分高地性で東北地方には割合多く産する種ではないかと考えられる。

兵庫県下でも戦前から色々と話題になったが氷の山, 扇の山には分布している種で, 近くでは伯耆大山に多いことは良く知られていて中国山脈には全体に分布しているのではないだろうか。また摩耶山あたりにもまだ元気にいそうに思われ(県下中間帯に全く記録の無い特異な分布をしている種でもあり)開発によってその生活は遂次侵されつゝはあるが, なんとか生きつゞけてほしいものではある。(DEC. 1985)

兵 庫 県 の ベ ニ ボ タ ル (1)

(兵庫県甲虫相資料・169)

高 橋 寿 郎

日本産ベニボタルに就いては中根猛彦博士による名著“Fauna Japonica:Lycidae, 1969”でその当時までの日本産6族, 19属, 87種が詳しく解説された。これによって日本産ベニボタルの研究史も良くわかるし, 日本にいるベニボタルの同定も非常にやり易くなった。なおこの著では和名が全く使用されていないが同博士は同じ年“日本産ベニボタル科目録”を発表しておられるの

でそちらを見れば良いわけである。その後引続き中根博士による研究(1970, 1970, 1975, 1977, 1980, 1985)及び中條道夫・佐藤正孝氏の研究(1970)により10種2亜種が知られている。

中根博士の1969年の論文の中で1種はその後中根博士がヨーロッパのタイプを調べた結果日本産でないらしいとされている。1亜種が独立種に格上げされており、1種が独立属の種と扱われた。1970年に北海道産の1新種、1985年には九州、西表島産3新種と1亜種の種への昇格の記載をしておられる。従って日本産のベニボタルは6族20属97種が知られていることになるかと思う。1984年迄の経緯については中根博士が概説をしておられる(1984)。

いづれにしても本州にだけいる種というのは58種位のようなものである。1985年には松田 潔、佐藤正孝氏による原色図説(原色日本甲虫図鑑 Ⅲ, 70種図説)も出版されこの仲間の同定も比較的楽になった。とは云え類似種が結構多いので同定はそれ程楽でない点も多々ある。

一方これらベニボタル類の生態面についてはほとんど見るべきものがない。その生活がわかっていないものばかりである。この方面の調査は今後の課題の一つかとも思う。

兵庫県に産するベニボタル類については筆者が1964年に18種を記録したが同定の誤りもありその後多くの資料の集積もあり筆者自身も出来るだけ調査につとめた結果此処に再度県下産ベニボタル類をまとめ報告させて頂くことにした。まだ未調査地点もあれば調査不充分の点も多々あるのでこれ以上の種が分布していることも考えられるし個々の種に就いてもより詳しい調査をしなければいけないように考えられる。尚浅学未熟のため同定上の誤りが多くあるかと心配している御指導、御教示を頂ければ幸である。

Family Lycidae ベニボタル科

1. *Lycostomus modestus* (Kiesenwetter, 1874) ベニボタル

Kiesenwetterにより九州を産地に *Lycus modestus* として記載された種である(Berliner Ent. Zeitschr., 18:250-251, 1874)。分布は可成り広いし大方の図鑑にも図説されて良く知られている種である。口器が前方へ著しく突出し両眼の間にへこみがある特徴で簡単に見わけることが出来る。幼虫は朽ちた針葉樹皮下に見出されるとある。

本種は兵庫県下でも広く分布しているし、可成り普通に得られる種である。

産地：川辺郡猪名川町上阿古谷、槻並〔仲田, 1978, 1982〕*。川西市笹部、横地〔仲田, 1978, 1982〕, 一の島居〔lex., 17-VI-1953〕。神戸市御影〔関, 1933〕, 六甲山〔lex., 10-VII-1955〕, 二十渉〔2exs., 26-VI-1955〕, 山の街〔lex., 13-VI-1954, 2exs., 1-VI-1958, 2exs., 7-VI-1959〕, 藍那〔lex., 10-VI-1978〕, 押部谷町木見〔lex., 23-

* 産地の所で〔 〕は記録の引用, ()の中は筆者採集標本所有のもの。

Ⅵ-1980), 鳥原 (3exs., 11-Ⅵ-1967, lex., 1-Ⅵ-1969, lex., 6-Ⅵ-1980, lex., 11-Ⅵ-1980, lex., 12-Ⅵ-1980, lex., 15-Ⅵ-1980, lex., 7-Ⅵ-1981, lex., 16-Ⅵ-1981, lex., 17-Ⅵ-1981, lex., 4-Ⅵ-1982, lex., 29-V-1983, lex., 1-Ⅵ-1983, lex., 2-Ⅵ-1983, lex., 3-Ⅵ-1983, lex., 30-Ⅵ-1984, lex., 24-Ⅵ-1984, lex., 4-Ⅵ-1985)。美濃郡吉川 (3exs., 30-V-1985)。加東郡東条町森 (lex., 22-Ⅵ-1984, 2exs., 4-Ⅶ-1984)。多可郡三谷 (16exs., 8-Ⅶ-1975), 鳥羽 (5exs., 5-Ⅶ-1975)。神崎郡大河内町川上 (2exs., 2-Ⅶ-1977, 2exs., 15-Ⅶ-1977, 5exs., 23-Ⅶ-1977)。相生市三濃山 (lex., 20-Ⅶ-1974)。宍粟郡福知溪谷 (lex., 20-Ⅶ-1976), 水谷 (40exs., 17-Ⅶ-1981), 音水 (lex., 13-Ⅶ-1958, 5exs., 20-Ⅶ-1959, 2exs., 25-Ⅶ-1972, K. Tsuji det., 3exs., 24-Ⅶ-1973)。城崎郡三川山〔高橋, 1975, 1985〕。養父郡氷の山 (lex., 12-Ⅶ-1951, 2exs., 2-Ⅷ-1953, 2exs., 25-Ⅶ-1955, 4exs., 27-Ⅶ-1956, 12exs., 21-Ⅷ-1958)〔中根, 1969, 高橋, 1985〕。美方郡扇ノ山〔辻, 1960, 1963., 辻, 岸田, 1972, 高橋, 1975, 1985〕。

2. *Lycostomus semiellipticus* Reitter, 1910 フトベニボタル

Reitter の記載した種であるが原記載 (Wiener Ent. Zeitg. 29:204, 1910) を見っていないので日本の何処産で記載されたのか知らない。前種の様に頭は吻状に延びている種で前種とは前胸の形が違い (半円形に近い), 体は巾広く暗色毛を装う等の点で見別けられる (原色図説もある)。

中根博士によると原型はおもに中部山地以北におり広島県から西には上翅が黒くて黒毛をもち、肩部周辺が広く赤くて赤い毛をもつ subsp. *kumamotonis* (松村松年博士が北大所蔵の熊本産標本に命名されたもの) が分布するとされている。兵庫県産のものは原型だと思われる。分布は北海道, 本州, 四国, 九州と広いが兵庫県下ではやゝ山地帯に分布しているようで可成り個体数が少いように思われる。

産地: 神戸市山の街 (lex., 7-Ⅶ-1959)。多可郡鳥羽 (lex., 5-Ⅶ-1975)。宍粟郡音水 (lex., 20-Ⅶ-1959)。養父郡氷の山 (lex., 12-Ⅷ-1955)。美方郡扇ノ山〔辻・岸田, 1972〕。

3. *Calochromus rubrovestitus* Nakane et Ohbayashi, 1955

ツヤバネベニボタル

中根猛彦博士と大林一夫氏により記載された種である (Aki tu, Vol. IV, No. 2, pp. 29-30, 1955)。

タイプに使用された標本の産地は青森県 (Yachionsen, Towada), 岐阜県 (Hirugano, Amagodani), 京都府 (Ashiu, Mikuni-toge), 和歌山県 (Kitayamakyo) である。現在分布は本州, 四国, 九州と知られている。

兵庫県下で筆者は未採集であるが次の様な記録がある。県下でどの様に分布しているのが良くわかっていない。原色の図説もある (1963, 1985)。

産地: 養父郡氷の山 [lex., 17-VIII-1972, K. Tsuji leg.], 美方郡扇ノ山 [辻, 岸田, 1972]。

4. *Macrolycus excellens* Nakane, 1969 オオクシヒゲベニボタル

中根博士により記載された種である (Fauna Japonica, Lycidae, pp. 31-33, 1969)。

タイプ標本の産地は青森県 (Yachi Spa), 奈良県 (Kasuga), 鳥取県 (Hoki Daisen), 愛媛県 (Odamiyama), 福岡県 (Mt. Sobo) であり, 分布は本州, 四国, 九州である。割合大形で前胸後角は上から見て棘状に外へ突出している。

兵庫県下での記録は従来あまり無いようであるが案外見落されているのではないだろうか。

産地: 神戸市六甲山 (lex., 19-VI-1967), 藍那 (lex., 10-VI-1978), 鳥原 (lex., 1-VI-1969, lex., 10-VI-1980, lex., 11-VI-1980., lex., 24-V-1982, lex., 8-VI-1982, lex., 15-VI-1982, lex., 6-VI-1983, lex., 14-VI-1983, lex., 18-VI-1984, lex., 30-VI-1984), 垂水 (3exs., 10-V-1985), 美郷郡吉川 (lex., 6-VI-1985)。

5. *Macrolycus flabellatus* (Motschulsky, 1860) クシヒゲベニボタル

Motschulsky により *Lygistropterus* 属の種として記載された種である (Schrenck's Reisen u. Forsch. Amur.-Lande, 2(2), Col. : 114, pl. 7, fig. 29, 1860)。

分布は可成り広く中国, 朝鮮, 樺太とか東シベリアに産し日本では北海道, 本州, 四国, 九州に分布とあるが中根博士によると本州の中部以北にふつうに見られる種であると述べておられる。松田, 佐藤両氏も近畿地方以西では局地的で個体数も少いとしておられる (1985)。兵庫県下での記録はあるが筆者自身は加東郡下で採集しているだけで県下産の分布が今一つ良くわからない種である。尚筆者が 1964 年にクシヒゲベニボタル *Macrolycus dominator* として記録した種は同定間違いであったのでここに取消しておく。

産地: 川西市大和, 笹部 [仲田, 1978, 1982], 加東郡東条町森 (lex., 18-V-1984), 養父郡氷の山 [高橋, 1985], 美方郡扇ノ山 [辻, 1960, 1963, 高橋, 1975, 1985]。

6. *Macrolycus montanus* Nakane, 1967

ミヤマクシヒゲベニボタル

中根博士により記載された種である (Frag. Coleop. Pars. 18, p.71, 1967)。そのタイプの産地は長野県 (Shimashima-dani, Iwanadome, Kiso Ontake), 静岡県 (Kida), 三重県 (Ohsugidani), 和歌山県 (Mt. Ohdaigahara) である。

本種は前記クシヒゲベニボタルに大変良く似ているが可成り小さく前胸背の側方より円味を有し前方ふくらんでいる。交尾器の形状も異なる。分布は本州だけのようである。兵庫県下では和名のように山地帯でみつかっているだけであり良く調査をしなくてはいけない種である。

産地：宍粟郡赤西 (lex., 3-VI-1979)。美方郡扇の山 (高橋, 1978)。

7. *Macrolycus similaris* Nakane, 1969

ヒメクシヒゲベニボタル

中根博士の記載された種である (Fauna Japonica: Lycidae, pp. 26-28, 1969)。

タイプの産地は次のように多い。即ち鹿児島県 (Sata), 福岡県 (Mt. Sobo), 愛媛県 (Omogo, Mt. Tengudake, Odamiyama), 鳥取県 (Mt. Hoki-Daisen), 隠岐島 (Goka, Mt. Daimanji)。

同博士が 1967 年 *M. pectinifer* (Kiesenwetter, 1874) として記録された (Frag. Coleop. pars. 18, p.71, 1967) のがこの種に当る。

この種もクシヒゲベニボタルに似るがやや小形で触角第 3 節は三角形で分枝がない。

兵庫県下ではやや山地帯に分布しているようである。

産地：多可郡白山 (1♀, 27-V-1973, K. Tsuji det.)。宍粟郡音水 (lex., 20-VII-1959, 1♂, 15-VII-1973, K. Tsuji det.)。養父郡氷の山 (lex., 25-VII-1959)。美方郡扇ノ山 (辻, 岸田, 1972)。

8. *Mesolycus atrorufus* (Kiesenwetter, 1879)

ホソベニボタル

Kiesenwetter が *Eros* 属で記載した (Deutsch. Ent. Zeitschr., 23:305, 1879)。Schönfeldt は日本産甲虫目録 (1887) の中で *Dictyopterus* 属で記録している。また同じく *Mesolycus puniceus* Gorham と記録された種も本種のことである。

本種の図説は割合多くあり分布も広い。花上に多くいるともある。兵庫県下での分布も広いようであるが個体数はそれ程多いとも思われない。

産地：川辺郡猪名川町民田 (仲田, 1970, 1978, 1982)。神戸市山の街 (lex., 4-VII-1954)。神崎郡笠形山 (2 exs., 12-VII-1975)。宍粟郡坂の谷 (3 exs., 22-VII-1979)。氷上郡 (山本, 1958)。養父郡氷の山 (lex., 27-VII-1956, lex., 21-VII-1958, lex., 27-VII-1956, lex., 21-VII-1958, lex., 25-VII-1959)。美方郡扇ノ山 (辻, 1960,

辻, 岸田, 1972]。

9. *Libnetis granicollis* (Kiesenwetter, 1879)

コクロハナボタル

Kiesenwetter が *Eros* 属で記載 (Deutsch. Ent. Zeitsch. 23:305, 1879)。中根博士による図説ならびに解説があり (1953, 1963, 1984), 松田, 佐藤両氏も原色で図説された (1985)。分布は日本全土である。兵庫県下にも広く分布していると考えられるが記録は思った程されていない。

産地: 神戸市藍那 (lex., 14:Ⅶ-1978)。神崎郡大河内町川上 (3exs., 15-Ⅶ-1977, 2exs., 23-Ⅶ-1977)。朝来郡須留ヶ峰 (lex., 31-V-1975, M.Yuma leg.)。宍粟郡音水 (lex., 15-Ⅶ-1973)。水上郡〔山本, 1958〕。養父郡氷の山 (2exs., 27-Ⅶ-1956, 2exs., 21-Ⅶ-1958)。美方郡扇ノ山〔辻, 岸田, 1972〕。

(JAN. 1986.)

宝塚大橋のカメムシ

新 家 勝

I. はじめに

1978, 9. 新装成った宝塚大橋の電燈に飛来する蛾の採集を始めた頃, 甲虫, カメムシなどの各種昆虫もこの電燈に多数飛来した。著名なヨコヅナツチカメムシが採れることやオオホシカメムシの多いことに驚いた。蛾だけでなく, これらの昆虫も一通り採集することにしたところ, カメムシは二十余種に達し, その中には結構興味深いものもあるので, 報告させていただく。今回の報告は 1978. 9~1985. 12 間とし, 「宝塚市」は省略して記載する。

II. 報告内容

1. Cydnidae ツチカメムシ科

(1) *Adrisa magna* Uhler ヨコヅナツチカメムシ

V, 29, 1979 武庫川町

VI, 3, 1979 武庫川町

IV, 27, 1983 武庫川町

IV, 27, 1983 南口2丁目

かつては稀種といわれたカメムシであるが、そう珍しいものではなく、ここでは普通種である。一度に飛来する数は、そう多くはなく、1・2頭であるが、4・5月頃、度々、出現する。特に多かったのはⅣ，27，1983で5頭を捕獲した。内、通行人に踏み殺されていた2頭を標本にし、他の3頭は宝塚ファミリーランド内へ逃がしてやった。

(2) *Macrocytus fraterculus* Horváth

Ⅷ，9，1979 武庫川町 コツチカメムシ

付近の美座2丁目，自宅の電燈に飛来したものをⅧ，7，1979に採集している。

2. Pentatomidae カメムシ科

(1) *Scotinophara lurida* Burmeister クロカメムシ

Ⅷ，8，1979 南口2丁目

付近の武庫川河川敷にいる。約2Km下流の末広町の石下からⅧ，18，1978に採集している。

(2) *Scotinoprara horvathi* Distant オオクロカメムシ

Ⅷ，10，1979 南口2丁目

(3) *Halyomorpha brevis* Walker クサギカメムシ

Ⅷ，10，1979 武庫川町

どこにでも多いカメムシであり，ここでもよくみかけられる。

(4) *Nezara antennata* Scott アオクサカメムシ

Ⅶ，27，1979 武庫川町

Ⅷ，9，1979 //

ここでも非常に多いカメムシであり，匂いは最も強い。筆者は無類のカメムシ好きなので，この匂いがたまらない芳香に感じられ，みつけると捕まえてその匂いを嗅いでみることにしている。

(5) *Plautia crossata* Dallas チャバネアオカメムシ

X，19，1978 南口2丁目

V，6，1979 南口2丁目

ここでは最も多いカメムシであり，発生時期には大群が飛来する。

(6) *Glaucias subpunctatus* Walker ツヤアオカメムシ

X，2，1978 南口2丁目

V，10，1979 武庫川町

X，21，1979 //

アオクサカメムシ同様，非常に多いカメムシである。

3. Acanthosomatidae ツノカメムシ科
- (1) *Sastragala esakii* Hasegawa エサキモンキツノカメムシ
VII, 18, 1983 武庫川町
- (2) *Dichobothrium nubilum* Dallas アオモンカメムシ
IX, 25, 1979 南口2丁目
4. Urostylidae クヌギカメムシ科
- (1) *Urostylis westwoodi* Scott クヌギカメムシ
X, 3, 1983 南口2丁目
次種に混じって1頭だけ採集した。
- (2) *Urostylis annulicornis* Scott ヘラクヌギカメムシ
X, 3, 1983 南口2丁目
20頭余が橋の手摺りや路上にいた。余り見かけないカメムシなので、安全な所へ逃がしてやるため生虫管に入れて持ち帰ったが、自らの発散物質のため大半が死んでいた。
1984年にもこの時期に飛来した。
5. Coreidae ヘリカメムシ科
- (1) *Homoeocerus unipunctatus* Thunberg ホシハラビロヘリカメムシ
IX, 8, 1979 武庫川町
- (2) *Anacanthocoris striicornis* Scott オオクモヘリカメムシ
X, 12, 1978 武庫川町
X, 12, 1978 南口2丁目
小数ではあるが、ほぼ毎年、10・11月に飛来する。
- (3) *Acanthocoris sordidus* Thunberg オオズキカメムシ
V, 23, 1979 武庫川町
約2Km下流の美座2丁目、自宅のホオズキに毎年、群棲する。
- (4) *Cletus trigonus* Thunberg ホソヘリカメムシ
V, 31, 1979 武庫川町
- (5) *Riptortus clavatus* Thunberg ホソヘリカメムシ
XI, 7, 1979 武庫川町
春から秋にかけてよく飛来する。
6. Lygaeidae ナガカメムシ科
- (1) *Pachybrachius lateralis* Scott キベリヒョウタンナガカメムシ
VIII, 29, 1982 武庫川町

- (2) *Rhyparochromus albomaculatus* Scott モンシロナガカメムシ

IX, 29, 1979 南口2丁目

- (3) *Lethaeus assamensis* Distant オオチャイロナガカメムシ

VII, 19, 1983 武庫川町

VII, 6, 1985 //

7. *Largidae* オオホシカメムシ科

- (1) *Physopelta gutta* Burmeister オオホシカメムシ

IX, 27, 1978 武庫川町

IX, 28, 1978 南口2丁目

5月中旬から出現し、11月中旬まで極めて多数飛来する。一晩に飛来する数ではチャパネアオカメムシに劣るが、年間を通じて飛来する数は、むしろ多いと思われる。普通種であるが、他の場所では余り見かけない。ここでは数が多いことで注目されるカメムシであるが、他の昆虫同様、年々減少している。1983, 10, 3, の19:30~20:00までの間、ここに飛来した本種を片端から捕獲したところ37頭を数えた。付近に群棲地があることが考えられるが、未確認であり、ここでの食草は確認していない。

- (2) *Physopelta cincticollis* Stål ヒメホシカメムシ

VIII, 3, 1979 武庫川町

VIII, 10, 1979 //

前種同様、春から晩秋まで飛来するが、遙かに少い。

- (3) *Pyrrhocoris tibialis* Stål フタモンホシカメムシ

VIII, 24, 1983 南口2丁目

VII, 10, 1984 //

附近の武庫川河川敷の雑草間に普通であり、XI, 18, 1978に約2Km下流の末広町の石下から採集している。

8. *Reduviidae* サシガメ科

- (1) *Oncocephalus philippinus* Lethierry トビイロサシガメ

V, 29, 1979 武庫川町

附近の武庫川河川敷の石下に普通であり、XI, 18, 1978に約2Km下流の末広町の石下から採集している。

- (2) *Oncocephalus breviscutum* Reute クロトビサシガメ

IX, 14, 1982 武庫川町

IX, 6, 1984 //

最近の図鑑には記載されていないが、僅かに加藤正世著 分類原色日本昆虫図鑑(昭和8年12月16日発行, 厚生閣)に *Oncocephalus* Sp. クロトビサシガメとの記載があるのみであり, 本誌に記載の学名は, 高橋寿郎氏にご教示いただいたものである。同氏ご所蔵の甲南高等学校博物研究会会誌“博物研究”No.3, ページ14~15(1938)によれば, 谷口和義氏(現在の黒佐和義博士)が次の通り採集または確認しておられる。

1♂, IX, 23, 1936 武庫郡本山村(谷口和義氏採集)

1♂, XII, 11, 1937 “ (“)

1♀, XII, 16, 1937 “ (“)

1♀, XII, 17, 1938 六甲山麓土橋(“)

1♀, I, 18, 1938(死体)摩耶山麓高雄(“)

2EX. 武庫郡山田村箕谷産

1EX. 川辺郡神津村軍行橋附近産(福貴正三氏採集)

以上の記録によると, 当時, 県下の東部でかなり採集されていたことになるが, その後の公開記録はないようであり, 今回は44年ぶりの記録になるものと思われる。

(3) *Pirates turpis* Walker クロモンサシガメ

VII, 4, 1983 南口2丁目

素手で捕えた際, 刺されてしまった。電撃のようなサシガメの痛覚を初めて味わった。

(4) *Sirthenia flavipes* Stål キイロサシガメ

V, 20, 1983 武庫川町

(5) *Velinus nodipes* Uhler ヤニサシガメ

VII, 7, 1985 南口2丁目

(6) *Polididus armatissimus* Stal トゲサシガメ

VIII, 20, 1983 南口2丁目

本種は, 日本昆虫図鑑(1950年, 北隆館発行)や前記の分類原色日本昆虫図鑑に記載されているが, 最近の図鑑には記載されていないようである。高橋寿郎氏にご教示いただいたところによると, 1965年に山形県出石郡但東町中野で高橋 匡氏が採集された記録があるとのことであり, 今回は県下の公開記録としては2番目になると思われる。

III. まとめ

1978年9月から7年間, 宝塚大橋の電燈で採集したカメムシは, 29種となった。決して多いといえないが, カメムシ自体, 余り種類が多いものではないことから, 結構沢山採集できたともいえる。種類数はともかくとして, クロトビサシガメ, トゲサシガメの2種を得たことは大収穫で

であった。根気よく採集を続けていると、思わぬ珍品に巡り合うものであり、大層元気づけられた。

最後になりましたが、クロトビサシガメ及びトゲサシガメについて、いろいろとご教示いただき、この報告をお奨めいただきました高橋寿郎氏に厚く感謝致します。

〔参考文献〕

北隆館発行 原色日本昆虫大図鑑Ⅲ

北隆館発行 日本昆虫図鑑

厚生閣発行 分類原色日本昆虫図鑑

西宮市上ヶ原山田町のトンボ

田 中 稔

私は、きべりはむし第12巻第1号に甲山の東南を流れる上ヶ原水路のトンボを報告したが、今回は同じ甲山の東南の湿地に発生するトンボについて報告する。湿地は3ヶ所あり、1番上手にA湿地、B湿地、C湿地と続き、農業用の池、たんぼと続く。A湿地は、雑木のまばらな広い湿地で夏には水が完全になくなる。B湿地は、ススキがまばらな小さい湿地で夏でも水が少し残っている。C湿地は、葦が密生する沼で、中に入ると腰までズブズブといくような所で夏でも水は残っている。附近は、私と犬の散歩のコースで最盛期の6・7月には早朝の摂食飛翔、日中の羽化殻採集、夕方の摂食群飛を楽しめる所である。

オグマサナエ *Trigomphus ogumai* ASAHINA

24Ⅳ1983 羽化殻 2 B湿地

水面に浮かんでいたものを発見した。コンクリートの上で、日光浴をするようにとまっているのを見かける。

アオヤンマ *Aeschnophlebia longistigma* SELYS

12Ⅵ1982 羽化殻 ♂2 ♀7 C湿地

13Ⅵ1982 " ♂7 ♀14 "

19Ⅵ1982 " ♂2 "

20 VII 1982	羽化殻	♂ 1	C湿地
26 VII 1982	"	♂ 2 ♀ 1	"
11 VIII 1982	"	♂ 2 ♀ 2	"
17 VIII 1982	"	♂ 3 ♀ 4	"
25 VIII 1982	"	♂ 7 ♀ 7	"
28 VIII 1982	"	♂ 1 ♀ 1	"
29 VIII 1982	"	♂ 9 ♀ 4	"

1982年7月4日には、羽化殻を採集しているそばで11時30分頃に本種の産卵を、同年7月17日には、雨上りの午後3時頃に羽化中の2♀を観察している。本種の摂食行動は特異で、1984年8月4日の観察では、葦の茎にすがるように上下移動飛翔していたので、始めは産卵かと思ったが他にも同じ事をする個体があったので、近くに寄ってよく見ると尾も曲げていなかったの、茎にとまっている虫を摂食しているものと思う。本種は他のヤンマとちがって高飛することはなく、稲、雑草の上をかすめるようにして低く飛ぶのが特徴である。

ネアカヨシヤンマ *Aeschnophlebia anisoptera* SELYS

13 VII 1979	羽化殻	♀ 1	C湿地
6 VI 1982	"	♂ 3	"
13 VI 1982	"	♂ 2	B湿地
26 VI 1982	"	♀ 1	C湿地
4 VII 1982	"	♀ 1	"
11 VIII 1982	"	♂ 2 ♀ 1	"
17 VIII 1982	"	♂ 2 ♀ 1	"
25 VIII 1982	"	♀ 1	"
29 VIII 1982	"	♀ 3	B湿地

カトリヤンマ *Gynacantha japonica* BARTENEF

まだ羽化殻を発見していないが、日没後かなり暗くなってからアスファルトの上を低く飛ぶ個体をよく見る。私は、1981年8月12日、淡路島の浦でたんぼの稲に羽化殻を発見したことがある。

ヤブヤンマ *Polycanthagyna melanictera* SELYS

13 VI 1982	羽化殻	♂ 1	C湿地
------------	-----	-----	-----

本種の発生場所は他にあると思うが、まだ発見できないでいる。夕方に他のヤンマに混って高飛するのをよく見る。1976年、1977年は特に多かった。1985年7月15日の10時頃に、自宅の池のそばの湿ったブロックに、垂直にとまり尾を曲げて産卵の姿勢をとった個体を観察したことがある。

マルタンヤンマ *Anaciaeschna martini* SELYS

17 VII 1982 羽化殻 2 ♀ 1 C湿地

29 VII 1982 // 1 ♀ 1 //

成虫はきべりはむし第8巻第1号に報告したが、その後は採集、目撃もない。

ギンヤンマ *Anax parthenope* BRAUER

個体数は多いが、A, B, C, 湿地には羽化殻が見られない。発生すると見られる農業用の池は、立入禁止のため羽化殻を採集していない。

クロスジギンヤンマ *Anax nigrofasciatus* OGUMA

13 VI 1982 羽化殻 ♂ 1 B湿地

6 V 1984 // ♂ 3 ♀ 5 //

B, C湿地を、パトロールするのをよく見るが♀はまだ見たことがない。

ハラビロトンボ *Lyriothemis pachygastra* SELYS

13 V 1984 羽化殻 12 A湿地

// // 2 B湿地

本種の個体数は多く、A, B, C湿地の他に雨の降った時だけ水のある湿地にも発生しているようである。

オオシオカラトンボ *Orthetrum triangulare* SELYS

C湿地に、成虫、羽化殻の個体数が多い。

ヨツボシトンボ *Libellula quadrimaculata* SCHIDT

羽化殻は発見していないが、B, C湿地に縄張り、交尾、産卵を観察している。

○参考文献 石田昇三 原色日本昆虫生態図鑑Ⅱトンボ編 保育社

兵庫県未記録のコメツキムシ

岸 井 尚

兵庫県下からのコメツキムシについては筆者(1984)が本誌上(Vol.12, No. 1, 2)に高橋寿郎氏の蒐集標本を中心に、これまでの記録を含めてまとめたものが126種あるが、その後、有本久之氏(1985)がやはり本誌上(Vol. 13, No. 1)で5種追加した。また筆者は勤務校の研究論集(Bull Heian High Sch., 29, 1985:28~29)に新種*Actenicerus ashiaka*を記載した際、そのパラタイプ標本として1雌を明石産(1970年5月5日、高橋寿郎氏採集)で記録

したので、これまでに計132種のもが本県下から知られていることになる。

今回、高橋寿郎氏が環境調査の際、三木市細川中で得られた微小なコメツキムシ若干の同定を依頼されたが、これには2種のもが含まれ、いずれも兵庫県下未記録のものであるので報告するものであり、種名等は下記の通りであるが、これからも微小種、特にミズギワコメツキ亜科に入るものから未記録種、あるいは新しいものが相当発見される可能性があるものと思われる。

終りに度々にわたり貴重な資料をお送りいただき、又本誌に発表する機会を与えられた高橋氏に深く謝意を表するものである。

Quasimus (Quasimus) jissunboushi KISHII, 1966

ケンチビマメコメツキ, 4 exs

Quasimus (Quasimus) kyotoensis KISHII, 1966

キョウトチビマメコメツキ, 4 exs

何れも三木市細川中、1985年7月11日、高橋寿郎氏採集品である。標本は筆者が保管している。なお前者はこれまで京都、岡山両県下から記録があるのみで、後者は分布が広く石川、愛知、京都、奈良、和歌山、岡山、高知、福岡などから得られている。

ミヤコアラハダチャイロコメツキ 宝塚に産す

岸 井 尚

1985年11月の下旬頃宝塚の方からお電話を頂戴いたし、高橋寿郎氏からの紹介でコメツキムシの同定をしていただきたいが、この12月15日に大阪長居自然科学博物館での甲虫学会に持参しますから宜しくとの事で、当日お会いしたのが新家 勝氏であった。同氏持参の標本は10数頭のもので灯火によく集まる、いわば普通種であったが、中に1頭大変な珍種が入っていたのに驚いた。小生が1969年に記載した *Ectamenogonus miyako* ミヤコアラハダチャイロコメツキと思われる新鮮な個体が台紙にのっていたのであるが、見た瞬間 *miyako* と判ったが、念の為帰って詳細に検鏡した所間違いなかったが、小生としては初めてみる雄の個体であった。生殖器は近似のアラハダチャイロコメツキ *E. rugipennis* と比し側片先端部が明瞭に長三角形で明らかに異なっていた。

この種は筆者が記載して以来長く再報がなく、最近保育社から出版された“原色日本甲虫図鑑(Ⅳ)”のp.72, Pl.13, fig.2に原色図が紹介されたが、データ記録はみられないもので、当日参会された渡辺昭彦、有本久之両氏と共に本種について話題にしていた所へ、出現したもので皆一様に驚いたも

のであった。

基準標本は昭和37年8月21日、京都東山の南端日吉神社附近の電灯に飛来したものを当時高校生であった楠亀 稔君が採集し、当時夏期生物宿題に昆虫標本作製があり提出されたものに混入していたものと記憶している。本属は暖地性のグループで、集光性の強いものが多いようで、本種は平地性、かつ5～8月と出現期間が長いので気をつけたら案外広く分布しているものかも知れない。

なお、今回の標本の採集データは下記の通りである。

雄、兵庫県宝塚市武庫川町、宝塚大橋、電灯、1985年5月28日、新家（ニイノミ）勝氏採集。（標本は筆者所蔵）。

終りにこの貴重な種を採集され、快く御提供下さった新家 勝氏ならびに、同氏を紹介された高橋寿郎氏には深い謝意を表したい。

ヨコヅナサシガメ兵庫県南部の記録

森 田 真 澄

ヨコヅナサシガメの兵庫県下の分布記録は高橋寿郎氏に依り集成されている（きべりはむし、9巻、1号、P. 18～20、1981）。此の報文を閲覧しても播磨地方の産地が少ない。これは調査不足に過ぎないのではと思い、1985年の秋季、努めて大木に目を付けて調査したところ6ヶ所の産地を発見したので以下報告する。

◎ 神戸市北区淡河町論破山 2-Ⅸ-1985

サクラの木の地上1.5mのところの有る深さ3cm程度の凹部に二十数頭の幼虫の群が存在した。群になっているところに脱皮殻10個程があった。このサクラは既に枯れていた。

◎ 三木市伽耶院 9-Ⅸ-1985

サクラの木の地上1.6mのところの凹部に十数頭の幼虫の群が存在した。蛾の幼虫をそろりそろりと追い掛けて行き腹端に口吻を突き刺している個体も目撃している。

◎ 加古川市八幡町八幡神社 22-Ⅸ-1985

クヌギの大木（幹周り2.5m、樹高16m）の地上1.8mのところのひび割れ部に脱皮殻とともに29頭の幼虫が存在した。他の木も探してみると幹周り1m樹高10mのアラカンに2頭（地上1.5mの樹皮のくぼみ）、幹周り1.4m、樹高9mのクヌギの木に2頭（地上1.2m）見

られた。2頭ずつしか幼虫が見られなかった木には脱皮殻は見られなかった。

◎ 姫路市仁豊野 26-Ⅸ-1985

アラカンに数頭の幼虫を見る。脱皮殻は見られなかった。

◎ 姫路市広畑区大町 14-X-1985

新日鉄前のポプラ並木の中的一本(幹周り1.7m), 地上から1.5mの深さ3cm, 大きさ手のひら位の凹部に26頭の幼虫が存在した。脱皮殻は6個あった。

◎ 姫路市広畑区鶴町 23-X-1985

ここは町名が異なるだけで上記の地点から200m程離れているだけである。新日鉄前のポプラ並木の中的一本(幹周り2.5m), 地上から0.4mの樹皮が割れかけて盛り上がったところに5頭の幼虫が存在した。脱皮殻は見付からず。

上記の地点とともにここは海岸線から900m程隔たった工業地帯の中心地でかつ樹木といえほとんど街路樹ばかりのところである。このような場所にも本種が進出していることは注目してもよいのではないかと考える。

宝塚大橋の照明燈で採集した蛾(続報その5)

新 家 勝

I. はじめに

今回は, これまでの採集品中の未同定品で新たに同定できたものについて報告するとともに, これまでに報告したうちの誤りについて訂正させていただく。なお, 採集場所については「宝塚市」を省略して記載する。

II. 未同定品中, 新たに同定したもの。

- | | |
|---------------------------------------|---------|
| (1) <i>Anacronicta plumbea</i> Butler | ナマリケンモン |
| Ⅵ, 15, 1982 南口2丁目 | |
| (2) <i>Agrotis tolionis</i> Butler | オオカブラメガ |
| Ⅺ, 10, 1983 南口2丁目 | |
| (3) <i>Oligonyx vulnerata</i> Butler | ベニモンヨトウ |
| V, 3, 1983 武庫川町 | |

- | | |
|--|-------------|
| (4) <i>Platysenta illecta</i> Walker | オオホシミミヨトウ |
| XI, 4, 1983 武庫川町 | |
| (5) <i>Avitta fasciosa</i> Moore | オオトウウスグロクチバ |
| XI, 4, 1983 武庫川町 | |
| (6) <i>Chilo sacchariphagus</i> Bojer | スジツトガ |
| V, 25, 1982 武庫川町 | |
| V, 23, 1985 // | |
| (7) <i>Endotricha theonalis</i> Walker | カバイロトガリメイガ |
| VIII, 14, 1982 武庫川町 | |

III. 訂 正

- (1) 第10巻第1号で報告した *Herculia nanalis* Wileman コシマメイガは誤りで、第13巻第2号で報告した *Herculia glaucinalis* Linne スタスジシマメイガが正しい。
- (2) 第10巻第2号で報告した *Alcis albifera* Inoue ヒメナカウスエダシヤクは誤りで、第10巻第1号で報告した *Alcis angulifera* ナカウスエダシヤクの矮小品であった。
- (3) 第11巻第1号で報告した *Rhynchobapta punctilinearia* Leech モンオビオエダシヤクは誤りで、第13巻第2号で報告した *Rhynchobata flaviceps* Butler マエキオエダシヤクが正しい。

IV. あとがき

1985. 2, 大阪市立自然史博物館に赴いた際、同博物館のご好意により講談社発行の日本産蛾類大図鑑をみせていただいた。その際、これまでの未同定品中、幾種かのものが同定できた。また、この図鑑が最近のカラー印刷技術の向上に伴い、従来とは比較にならない程、図版が鮮明でかつ忠実なものになっていることを確認した。そこで、この図鑑を購入し、未同定品について照合するとともに、既同定品についても再照合したところ、汚損がはげしい2・3種を除いて同定でき、また一部のものについて誤同定があったことがわかった。

今回報告するもののうち、オオトウウスグロクチバ、オオホシミミヨトウ、スジツトガは、従来の図鑑に記載されていなかったもので、それぞれオオトウウスグロクチバは極地的なもの、オオホシミミヨトウは土着種とはいえないもの、スジツトガは外来種で分布を広げつつあるものである。

なお、従来の誤同定による報告につきましては、大変ご迷惑をお掛けしましたことをお詫び致します。

V. 参考文献 講談社 日本産蛾類大図鑑

宝塚市清荒神のチョウ（追録5）

加 藤 信一郎

今年（1985年）は、6月に八重山諸島へ採集に出かけ、その整理などに追われて十分な観察はできなかったが、昨年に引続き季節を通してチョウの発生は悪かったように思われる。昨秋多発したヒョウモン類は全く影をひそめたが、アサギマダラは今年も同じ場所で発生していた（加藤、1985）。また始めてナガサキアゲハの♀を採集できたので報告する。

1. ナガサキアゲハ *Papilio memmon thunbergii* von Siebold

1 ♀. 4-9-1985. 前翅長80 mm, 開長115 mm, 前後翅端間長110 mmときわめて大型である。地色は黒色, 前翅々脈間は白味がかかり, 後翅は♂と同様に青色が強く, 白斑紋は大きく第1~5室まで現われ, 最大幅は15 mm, 手元採品と比べて, 九州宮崎産とはサイズ, 地色, 翅形, 斑紋いずれも差異が見られ, むしろ沖縄本島産に近い。藤岡（1975）の高知市産大型の♀に最も酷似する。従って当地に漸く定着したものかそれとも偶産種かは今一つ定かでない。

採品はノウゼンカズラで吸蜜してから高飛し一度見失ったが, 自宅裏民家の垣根の茂みに休止しようとしていたものである。

2. アサギマダラ *Parantica sita nipponica* Moore

1 ♀. 9-10-1985. 前翅長59 mm, 開長95 mm, ホシナシヒヨドリバナに吸蜜にきていた。

文 献

藤岡知夫, 1975. 日本産蝶類大図鑑。講談社。

加藤信一郎, 1985. 宝塚市清荒神のチョウ（追録4）。きべりはむし, 13(1): 16, 17。

宝塚大橋のキイロゲンセイ

新 家 勝

昨年, 本年と宝塚大橋の照明燈でキイロゲンセイを採集した。キイロゲンセイの採集例は淡路島, 加西市など点々とあるようだが, 意外に少いようである。最も近くの採集例としては1969, 8, 5 川西市大和（仲田）がある。

1. VII. 10. 1984 宝塚市南口2丁目 宝塚大橋

飛来し、路面に静止していた。

標本は筆者保管

2. VII. 22. 1985 宝塚市南口2丁目 宝塚大橋

照明燈の周りを、接近したり離れたりをしながらぐるぐると旋回し、順次他の照明燈へと飛び回っていた。高度を下げたところでネットに納めた。

標本は高橋寿郎氏に寄贈。

宝塚市内におけるフタモンウバタマコメツキの採集記録 (続報 1)

新 家 勝

宝塚市内におけるフタモンウバタマコメツキの採集記録については、本誌第9巻第2号に報告したところであるが、その後も宝塚大橋の照明燈で継続的に採集されているのでその記録を報告させていただきます。

- | | | | |
|-----------------|---------|------|---------|
| 1. VI. 1, 1982 | 宝塚市武庫川町 | 宝塚大橋 | 標本は筆者保管 |
| 2. V. 30, 1984 | 〃 | 〃 | 標本化せず |
| 3. VI. 12, 1985 | 〃 | 〃 | 〃 |
| 4. VII. 8, 1985 | 〃 | 〃 | 〃 |

なお、一般に採集例の多いウバタマコメツキは、6月頃昼間によく飛んでおり、宝塚市内でも度々、採集しているが、宝塚大橋の照明燈ではこれまで採集していなかった。今年はVI. 26およびVII. 8にいずれも武庫川町、宝塚大橋で採集したので、あわせて報告させていただきます。

編 集 後 記

今年も寒い冬でした。会員の皆様方お変わり御座いませんか御伺い致します。本誌がお手許に届く頃は採集の好期です御活躍を御祈りします。

やっとのことでVol. 14, No. 1の発刊をすることが出来ました。資金不足もさることながら原稿難には全くお手あげの状態です。この調子だと早晩休刊も止むを得ないと憂鬱です。

次号Vol. 14, No. 2を11月には何とか発刊をと考えています。長短にかゝらず御投稿をお待ちしております。(T)。

きべりはむし 第14巻第1号

昭和61年5月25日発行

発行：兵庫県昆虫同好会

〒652 神戸市兵庫区氷室町1丁目44 高橋寿郎方

振替 神戸7-26646

印刷：榎 文 尚 堂

〒652 神戸市兵庫区下沢通3丁目4-11